

## 幼児における仲間の相互作用が公正観の 発達に及ぼす影響について

筑波大学心理学系 渡辺 弥生

Peer interaction influencing the development of children's distributive justice

Yayoi Watanabe (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

To study the manner in which peer interaction influences children's distributive justice, each of 120 children aged 4 to 5 was assigned to A group (consisted of children of the same level), B group (consisted of children of mixed levels), modeling group, or control group. All subjects were given a standard version of distributive justice interview as the pretest and posttest. Sixty children (A group and B group) participated in a positive justice peer debate in trial and were videotaped during the discussion, in which each trial was required to reach a consensus concerning a fair way to divide 10 tokens among themselves. An observational coding was used to assess subjects' discourse patterns. The result suggested that peer interaction in groups of children of mixed levels and of modeling most effectively influence the development of children's distributive justice. Children of higher levels frequently made verbal statements or requests and engaged in accepting or transforming interaction. And children who made negative comments tend not to advance in their level of distributive justice.

Key words : peer interaction, distributive justice, children, fair.

### 問 題

分配に関する公正観が, Damon(1975, 1980, 1981)により検討されてきた。Damonは, 分配における公正さの発達段階として6段階を提唱したが, この発達段階は, わが国の幼児や児童においても, その段階の順序性, 及び, 普遍性において妥当であることが既に明らかにされている(渡辺, 1986)。こうした公正さは, 道徳概念の一つであると考えられ, 子どもの分配行動において重要な規定因の一つとなることも実証された(渡辺, 1986)。

一般に, 「公正」の概念は, 子どもと周囲の環境との相互作用の結果, 獲得されていくと考えられるが, 特に, 幼少の頃は, 社会化のエージェントである,

本研究の実施にあたり, ご協力下さったひたち学院の先生方, 園児の皆様へ心から感謝致します。また, 本論文の作成にあたり, 山本裕子さん, 天沼聡さん, 神村寿理さん, 林江利さん, 山田由起子さんに大変お世話になりました。記して感謝致します。

親や教師という大人の影響が強いと考えられる。幼稚園に通う以前においては, 家庭が子どもにとって活動の中心となる場所であるため, 両親を模倣したり, しつけられて, 「公正にする」ことの基本的な考え方や規則を身につけていく。ただし, 自己中心的なものの見方しかできず, 外から権威的に与えられた, 命令にしか従うことができない傾向の強い時期である。ところが, 幼稚園に行くぐらいになると, わがままがかなり許される縦の関係とは全く異なる横の関係が生活の大部分を占めるようになる。ものを分けるにしろ, それまでは, 自分中心に分配されていたことが許されないようになり, 様々な争いや, 心理的な葛藤状態を味わうようになる。遊び道具にしろ, 複数の子どもの気持ちがあぶつかり合い, みんながみんな自分の欲求を取り下げないため, ケンカになることもしばしばである。このような過程のなかで, 子どもは他人の存在に気がつき, 相手の立場や欲求を理解するようになる。そして, 自分だけではなく, 場面に直面している複数の子どもにとって

の問題の解決方法を考察することが可能になると考えられる。

従来の心理学研究においても、仲間の相互作用の重要性を主張した研究は数多い。Piaget (1932), Smedslund (1966) らは、仲間の相互作用過程において経験する認知的葛藤が道徳性や社会的認知の発達に大きな影響を及ぼしていると指摘している。ここでいう認知的葛藤は、最近では、子ども自身の内に生じる認知的葛藤とは区別して、ある課題に集団で直面した際に、協力して解決するために生じる個人間の認知的葛藤を含めたものが意味される。すなわち、子ども同士の社会的相互作用によって生じる個人間の認知的葛藤が集団で協力して解決されていく過程の中で、個人内の認知的葛藤をも解決し、より高次の認知発達段階へと導くという文脈から用いられている。Sullivan (1953) や Youniss (1980) は、仲間間での協同作業や話し合いが個々に分離した意見や考えをひとつに再構築する働きを明らかにし、その重要性を述べている。また、道徳性研究を概観しても、仲間間の話し合いが道徳的推論の発達に効果的であることが検討されている (Blatt & Kohlberg, 1975; Maitlund & Gouldman, 1974)。

しかし、仲間の相互作用の重要性や、その過程における認知的葛藤状態が発達の向上に及ぼす効果についてさかんに主張されているものの、実際に実験的に検討した研究はわずかである。また、わずかに見られるものも、特定のストーリーを与えて、その状況でどのようなことを考え、問題を解決するかといった研究が多く (Youniss & Volpe, 1978)、実際の状況を分析したものはほとんどない。道徳性研究においても、発達段階の存在を明らかにし、段階それ自体の内容等を吟味したものが大半であり、段階の向上において、媒介となる要因や過程について検討していないことが指摘されている (Damon, 1982)。また、仲間の相互作用の研究については、いくつも見られるが (Ervin-Tripp, 1978; Miller & Brownell, 1975)、その過程の分析にばかりにウエイトが置かれ、子どもの認知発達に及ぼす影響について検討されておらず、体系的な研究が為されていないのが現状である。

したがって、本研究では、仲間の相互作用の状況、特に、実際の分配場面を設定し、仲間とのやりとりが、個人あるいは集団の公正に対する認知の発達にどの程度の効果をもたらすものであるかを検討する。さらに、どのような心理的に葛藤した過程を経て、公正な解決に至るのか、その相互作用過程を分析し、認知発達との関係を明らかにすることを目的とする。

## 方 法

### 被験児

茨城県下の私立H幼稚園児4才児から6才児、計120名。男女約同数。

### 手続き

#### ①プリテスト (1986年6月実施)

幼児120名を対象にして、Damon (1975) の公正判断調査を翻訳して、1部修正した公正観の発達調査 (渡辺, 1986) が行われ、個人の発達段階が、測定された。その後、プリテストを行った120名は、4群、すなわち、相互作用A群30名 (同レベルの者、0-B段階のグループと1-A段階のグループがある)、相互作用B群30名 (異レベルの者、0-A段階、0-B段階、1-A段階の者が組み合わされている)、モデリング群30名、コントロール群30名に分けられた。

#### ②相互作用A、B群の実験 (1986年9月実施)

### 被験児

プリテストにおける発達段階に基づいて、相互作用A群、相互作用B群を構成した。各群1グループ3名ずつ、10グループで、形成されている。グループはすべて同性により構成した。

### 材料

作業用のモビール数10本、台紙、ビデオ機材一式、録音機、テープ、ごほうび用のカード10枚

### 手続き

被験児は、調査室に連れて行かれた。名前等は質問をとおして、レポートがとられたあと、以下のような教示が与えられた。「私たちは、でんでんむしのバッチを作っています。これから、みんなに手伝ってもらいたいのです。形や大きさは気にしないでいいですから、できるだけたくさん作ってください。」作業量に、差ができたところで、作業をやめさせ、各々どれだけ貢献したかを自分の前にある台紙の上に置いて自覚させ、他の子どもとの比較を行わせた。その後、「ここに、たくさんあればあるほどよいごほうびがもらえるカードが10枚あります。みんなで相談して、好きなように分けてください。」と指示が与えられた。話し合いの後に、分配された数を確認し、記録した。さらに、「Aちゃんは、X個作ったのに、カードY枚でいいの?」、「どうしてみんな同じがいいの?」、「ひとりだけたくさんもらう子がいてもいいのですか?」等の質問とともに、各々の感想がもとめられた。なお、分配の変更がある場合はそれを認め、更に、話し合いを続けさせた。

#### ③モデリング群 (1986年9月実施)

### 被験児

プリテストを行った内の30名

Table 1 公正な分配に関する議論においての子どもの社会的相互作用評定尺度

1. 意見及び要求
A. 言語的意見
(1)他者あるいは集団に関する分配解決について
(2)自分の分配に関する分配の解決について
(3)賛成あるいは反対
(4)情報/予測のみ
(5)説明のみ
(6)その他 (聞くことのできるもの)
B. 要求
(1)分配的解決に関する要求
(2)解決法ではないが賛否の要求
(3)情報/予測の要求
(4)説明の要求
(5)課題に関した行為の要求
(6)分配の解決に先立つ許可の要求
C. 非言語的意見と要求
(1)他者あるいは集団に関する分配の解決に関して
(2)自分の分配に関する分配の解決
(3)賛成/反対
(4)情報/予測
(5)その他
2. 相互作用の質
A. 受容
(1)直接的賛成
(2)他者の意見を総合的に賛成していることをほめかす繰り返しあるいは言い替え
B. 拒否
(1)直接的反対
(2)その他の対立する意見
(3)ひやかし
(4)先の意見に賛成しない新しい解決に関して
C. 変形
(1)他者の表現した考えと先行する意見との統合 (自分の考えも含む)
ア. 他者の意見の明確化あるいは訂正
イ. 一般的理由
ウ. 新しい要素を付加して他者の意見を拡大する
エ. 他者の考えを変化して妥協的な解決を導く
D. 中立あるいは無言

## 材料

ストーリーと補助図版3枚1セットが2種類(1つは、子ども3人が課題を行ったのち、教師によって報酬を均等に分けられるという設定であり[1-A相当]もう1つは、報酬が作業量に応じて分配

されるという設定のもの[1-B相当]である。男子用、女子用がある)。分配用のカード10枚。

## 手続き

ストーリーの内容は、相互作用群の設定を紙芝居風にしたものが用いられた(共通の補助図版が2枚用いられた)。ストーリーが読まれたあと、まず、自由に分配をさせ、そののち、理由が聞かれた。つぎに、3枚目の絵(上記の2種類のうちいずれか)が提示され、その条件の教示が与えられた。その後、「Aちゃんは、さっきこう分けてくれたけど、これでいいの。もし、変えるのだったら、変えてもいいよ。」と教示がなされ、分配の変更がある場合は、それを認め、さらにその理由が尋ねられた。

## ④ポストテスト(1986年10月実施)

プリテストと同様の手続きで行われた。コントロール群は、プリテストからポストテストまでの間に何の操作もなされなかった。

## ビデオの分析方法

コントロール群、モデリング群を除いて、すべてのグループの話し合い過程が、ビデオにより録画された。各グループの話し合い時間は、約15分から30分程度であった。評定は、公正な分配に関する議論においての子どもの社会的相互作用評定尺度(Damon, 1982)のうちコード1(意見及び要求のカテゴリー)、コード2(相互作用の限定)についてそれぞれ言語性・動作性の分析が行われた(Table 1)。マニュアルは、Damonのものを翻訳して使用した。

## 結果

### 各条件と発達段階の変化

各条件とプリテストからポストテストへの発達段階の変化との関係が検討された。発達段階の変化は、プリテストから比較してポストテストにおいて下降したもの、無変化なもの、上昇したものの、大きく3つに分けて検討した。その結果、有意な条件差が見られた( $\chi^2=11.65$ ,  $df=6$ ,  $p<.08$ )。Fig. 1に示されるとおり、モデリング群、相互作用B群(異レベル集団)において、発達段階の上昇した子どもが多く、それぞれ63.3%、53.3%いた。これに対し、相互作用A群(同レベル集団)では、下降したものが26.7%おり、上昇したものは30.0%と他群に比較して少なかった。

### プリテストにおける発達段階とその変化

プリテストの発達段階とプリテストからポストテストへの変化との関係が検討されたが、その結果、条件において有意な差が認められた( $\chi^2=28.44$ ,

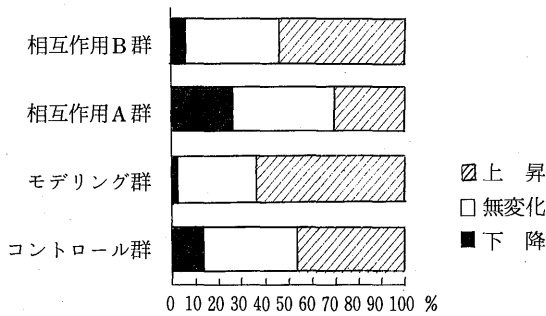


Fig. 1 群別の発達的变化

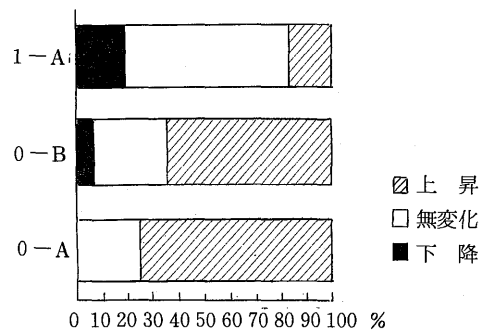


Fig. 2 プリテストでの発達段階とその変化

df = 4,  $P < .01$ ). Fig. 2のとおり, 段階の低いものほど上昇する傾向が強く, 1-A段階においては, ほぼ頭打ちの状態ではほとんど無変化であった.

**条件別のプリテストの発達段階と変化**

条件別に, プリテストにおける発達段階とその変化との関係が検討された.

モデリング群においては, 発達段階において変化の差が示されなかった ( $x^2 = 3.51$ ,  $df = 4$ , n.s.). 相互作用A群においても, 有意差は見られず ( $x^2 = 0.70$ ,  $df = 2$ , n.s.), いずれの段階においても, 無変化なものが40%以上あり, つぎに上昇したものが同じ程度いた.

相互作用B群について, Fig. 3に示されたが, 発達段階とその変化との関係が有意であった ( $x^2 = 18.57$ ,  $df = 4$ ,  $P < .01$ ). 0-A段階のものうち, 上昇したものが88.9%, 0-B段階のものうち上昇したものが77.7%であり, いずれも下降したものがいなかったのに対し, 1-A段階のものうち, 上昇したものはおらず, 下降したものが, 20%あり, 80%のものは無変化であった.

**発達段階別の条件と発達段階の変化**

0-A, 0-B, 1-Aの発達段階別に, 条件と発達段階の変化との関係が見られた. Fig. 4は, 0-A段階について示したものであるが, 相互作用B群 > モデリング群 > コントロール群といった順に上昇したものが多かった. 0-B群については, Fig. 5のとおり, 相互作用B群 > コントロール群 > モデリング群 > 相互作用A群の順であった. 1-A段階については, 無変化のものが多かった.

**仲間の相互作用過程の分析 (注: 相互作用A群と相互作用B群との比較)**

Table 1の社会的相互作用評定尺度のうち, 意見及び要求のコードにより分配決定に至る過程が分析された. また, 相互作用の質のコードについては言語と動作の2つに分けて評定した. なお, コードの判定は2人により行われたが, すべて約80%の一致率

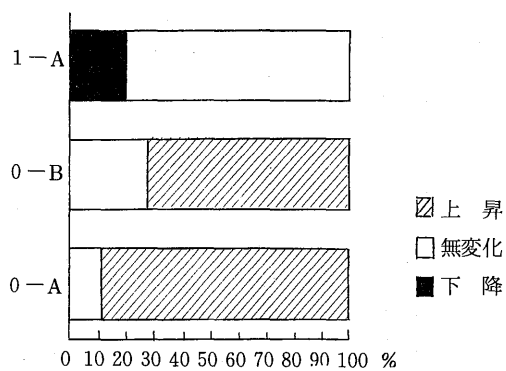


Fig. 3 相互作用B群のプリテストにおける発達段階とその変化

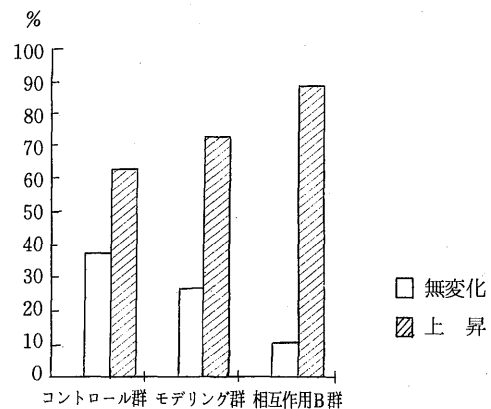


Fig. 4 0-A段階における群別の発達段階の変化

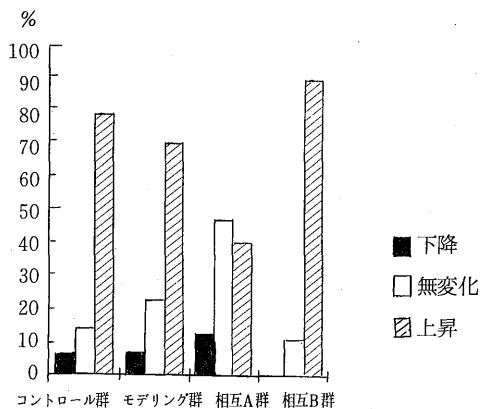


Fig. 5 0-B群における群別の発達段階の変化

① コード別頻度における相互作用A群と相互作用B群との比較

Table 2に各コードの平均値と標準偏差が示されている。そのうち、相互作用の質のコード2における言語的拒否においてのみ有意差が見られた ( $t = 8.69, df = 58, P < .01$ )。また、動作的受容と動作的拒否において傾向が見られた ( $t = 1.45, df = 58, P < .10$ ;  $t = 1.53, df = 58, P < .10$ )。すなわち、相互作用B群の方がA群よりも拒否的な発言や態度が少なく、動作的な受容が高いことが明らかになった。

② プリテストにおける各発達段階とコード別頻度との関係

まず、プリテストにおける発達段階と、発言の頻度数との関係を検討した。その結果、Fig. 6, 7に示されるとおり、Aの言語的意見、及び、Bの要求において、5%の水準で有意差が見られた ( $\chi^2 = 7.80, df = 2, P < .05$ ;  $\chi^2 = 9.94, df = 2, P < .01$ )。な

が得られ、十分高いことが確認された。下は評定の1例である。

\*相互作用過程の評定の1例 Table 1参照

A: 1, 2, 3, ……言語的意見の(4)  
 7, 8, 9, 10.  
 だから、えっと、6才だ……言語的意見の(4)  
 から、  
 5こずつ分ける。 ……言語的意見の(1)  
 あ、5こじゃないよね。 ……言語的意見の(1)  
 ん、5こずつにわけたら……言語的意見の(5)  
 なくなっちゃう。  
 あら、 ……言語的意見の(6)  
 どうしようかな。 ……要求の(1)  
 どうするの。 ……要求の(1)  
 C: わからない。 ……言語的意見の(6)  
 A: じゃあさ、こう決めたら; ……言語的意見の(1)  
 あのさー。  
 んっと多い。 ……言語的意見の(4)  
 どうしようか。 ……要求の(1)  
 それじゃあさー。あまつ ……言語的意見の(1)  
 たの\*\*ちゃんに。  
 (どうして\*\*ちゃんにあまったのあげるの)  
 A: 大きいから。 ……言語的意見の(5)  
 B: うん、1番大きいんだよ; ……言語的意見の(4)  
 \*\*ちゃん。  
 A: うんっと、背が大きいか ……言語的意見の(5)  
 ら。  
 (背が大きいからいちばんたくさんあげるの)  
 全員: うん。 ……言語的意見の(3)と  
 非言語的意見と要求の(3)

A, B, Cは3人の子ども。( )内は実験者。

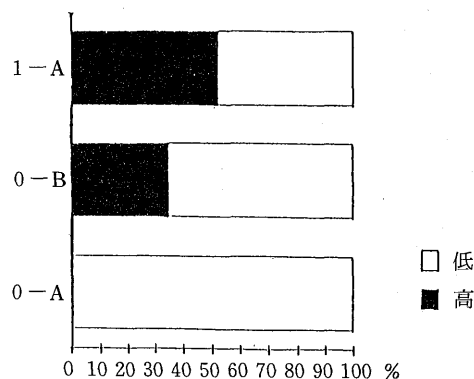


Fig. 6 プリテストにおける発達段階と言語的意見の頻度

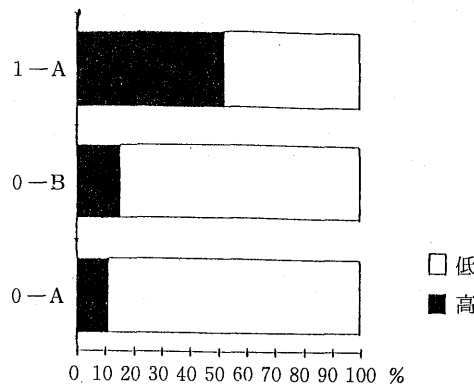


Fig. 7 プリテストにおける発達段階と要求の頻度

Table 2 コード別頻度の平均値における相互作用A群とB群の比較

コード 1	相互作用A群	相互作用B群
A. 言語的意見	9.03(9.21)	6.53(6.90)
B. 要求	0.93(2.18)	1.03(3.36)
C. 非言語的意見と要求	6.57(4.65)	7.53(4.63)
コード 2	相互作用A群	相互作用B群
言語		
A. 受容	1.73(2.35)	2.17(2.07)
B. 拒否	1.43(2.96)	0.30(0.84) **
C. 変形	0.60(1.16)	0.37(0.89)
D. 中立あるいは無言	0.03(0.18)	0.00(0.00)
動作		
A. 受容	3.07(2.49)	4.00(2.36) △
B. 拒否	1.27(2.99)	0.40(0.72) △
C. 変形	0.50(1.00)	0.27(0.52)
D. 中立あるいは無言	0.00(0.00)	0.03(0.18)

( ) 内は標準偏差, \*\* $p < .01$  △ $p < .10$ 

お、頻度数の高低は、平均値より大きい群を高群、小さい群を低群とした。すなわち、0-A段階のものに発語数は一般に少なく、0-B、1-Aと段階が高いものに発言の頻度の多いことが示された。これを群別に見ると、言語的意見においては相互作用B群にその傾向が強く見られた ( $\chi^2=10.30$ ,  $df=2$ ,  $p < .01$ )。相互作用の質のコード2においては、A受容的な言語、B変型的な言語の2カテゴリーに有意な差が見られ ( $\chi^2=6.64$ ,  $df=2$ ,  $p < .05$ ;  $\chi^2=6.46$ ,  $df=2$ ,  $p < .05$ )、段階の高いものほど受容的言語も変型的言語も頻度が高い傾向が認められた。

③ プリテストからポストテストへの発達段階の変化とコード別頻度との関係

意見、及び、要求のコード1において、言語的意見と、非言語的意見と要求の2カテゴリーに、10%水準の有意差が見られた ( $\chi^2=4.95$ ,  $df=2$ ,  $p < .10$ ;  $\chi^2=5.07$ ,  $df=2$ ,  $p < .10$ )。すなわち、言語的意見の数が多いものには、発達段階の変化しないものが多いのに対して、頻度の少ないものに発達段階の上昇したものが多かった。群別に見ると (Fig. 8, Fig. 9)、相互作用B群についてその傾向が強く見られた ( $\chi^2=5.19$ ,  $df=2$ ,  $p < .10$ )。また、非言語的意見と要求についても同じような傾向が見られたほか ( $\chi^2=6.3$ ,  $df=2$ ,  $p < .05$ )、段階が上昇したものにおいては、動作的拒否が少なく、下降したものは多く観察された。

## 考 察

モデリング群、相互作用A群、相互作用B群、コントロール群の4条件と発達段階の変化との関係が検討された。その結果、モデリング群、及び、相互作用B群 (異レベル集団) において、発達段階の上昇したものが多く認められた。モデリング群にお

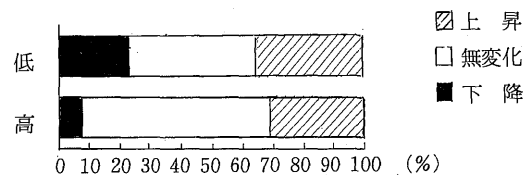


Fig. 8 相互作用A群における言語的意見の頻度と発達段階の変化

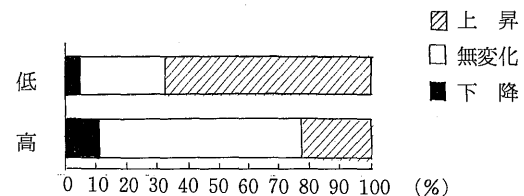


Fig. 9 相互作用B群における言語的意見の頻度と発達段階の変化

る上昇率が高いことは、Bandura (1977) で主張された、コンピテントなモデルの観察や模倣で生じる社会的相互作用の効果のためと考えられる。すなわち、高い段階のものの分配方法をそのまま取り入れたことが考えられる。これに対し、相互作用B群において発達段階の上昇率が高かったのは、同レベル段階の仲間よりも、異レベルの仲間間の方で、認知的により葛藤の強い状態が経験され、より高次の段階の解決を選択することに強く動機づけられたためと考えられる。これは、0-A、0-B、1-Aの発達段階毎について、条件別に発達段階の変化を比較した結果からも明らかであり、0-A、0-B段階に共通して、段階の上昇したものが相互作用B群に多かったほか、1-A段階についても、段階の変化しなかった、及び、段階の下降しなかったものは、相互作用B群で最も多くなっていた。

また、相互作用過程の分析においても、相互作用B群は動作的な受容面が高く、低い段階のものが葛藤しながら解決へと努力する様子が推測できる。逆に、拒否的な態度や言語は相互作用A群に多く、他人との間に認知的な葛藤状態が生じず、利己的な考えに固執して仕舞う傾向が理解される。したがって、今回実施された実験条件の中では、相互作用B群条件、すなわち、発達段階の異なる子ども同士の相互作用を行わせる条件が、幼児の公正観の発達に、かなりの影響を及ぼすことが明らかである。これは、他人の異なる考えや感情にふれ、認知的な葛藤状態を経験することが、自己中心的な解決のし方を抑えさせることを示唆する。ただし、高次の段階のものの分配解決を見せてやることだけでも発達にかなりの効果をもたらすこともモデリング群の結果により示唆された。今後、より年長のものに対しても同様のことが言えるのかどうかや、長期的な般化も期待されるのかいなかかが検討されるべきであろう。

また、全体を通した各発達段階の変化をみると、0-A段階の変化が顕著であった。1-A段階で変化したものは少なく、幼稚園レベルでは、頭打ちの状態にあることが明らかである。すなわち、4歳から6歳の時期においては、これ以上の上昇は期待されないといえる。また、公正に関する発達段階は必ずしも安定したものではなく、幼児期においては下降する場合も少なくないことが示された。

仲間の相互作用過程の分析全体については、以下のことが考察される。

まず、コード1における、言語的意見、言語的要求の2カテゴリーの発語数が発達段階の向上に伴い、増加していた。またこのとき、コード2においては、1-A段階のものについて受容的言語、及び、変形

的言語の頻度が高いことが示されている。これらのことを考え合わせると、発達段階の高いものほど、発言量が多いが、その内容は受容的、あるいは変形的なものであり、各被験児のグループ内での相互作用において、一種の指導的役割を演じていたものであることがいえよう。

つぎに、プリテストからポストテストへの発達段階の変化との関係についてであるが、コード1では、言語的意見と、非言語的意見と要求の2カテゴリーについて、その頻度の高いものには発達段階の変化しないものが、低いものには上昇したものが多かった。意見や要求の頻度が高いということは、相互作用の中で一種のリーダーシップをとっていたということの表われであると解釈することができる。またこのとき、発達段階に変化のなかったものには、1-A段階のものが多かったことが結果から明らかである。その意味で、発達段階の高いものが仲間同士の相互作用において指導的役割を担っていたであろうことが、ここでも支持されるのである。

コード2において、動作的拒否の数と発達段階の変化に有意な関連がみられたが、これについては次のようなことが考えられる。拒否と言えども相互作用のなかでは立派な意見と成り得るものであるが、本研究で見られた拒否は相手を納得させ得るような次元のものではなく、むしろ、わがまま勝手なふるまいであった可能性が高い。そのため、協力して解決しようという努力は放棄され、利己的な思考が強くなり、発達段階の下降を導くことになったと思われる。

最後に、グループそれぞれについて見ると、3人の性格や友だち関係などが大きく関与していることを痛感した。すなわち、子どもひとりひとりの個性が互いにつつかりあい、予測できない展開を導くことが明らかである。したがって、認知発達の高い段階の子どもでも消極的なものはある結果に従うことを強いられることもありうれば、ソシオメトリックな関係の影響により問題が解決されることもあり、集団のダイナミックスの複雑さを思わざるをえない。その意味で、教育現場で集団の相互作用を効果的に用いるためには、さらに、いろいろな視点から観察し、検討していかなければならない余地が残されていると思われる。

## 引用文献

- Bandura, A. 1977 Social learning theory. New York: Prentice-Hall.
- Blatt, M., & Kohlberg, L. 1975 The effects of classroom moral discussion on children's level of moral judgement. *Journal of Moral Education*, 4, 129-151.
- Damon, W. 1975 Early conceptions of positive justice as related to the development of operational reasoning. *Child Development*, 46, 796-799.
- Damon, W. 1980 Patterns of change in children's social reasoning: A two-year longitudinal study. *Child Development*, 51, 1089-1102.
- Damon, W. 1981 The development of justice and self-interest during childhood. In M. Lerner & S. Lerner(Eds.), *The justice motive in social behavior*.
- Damon, W. 1982 Peer interaction and the process of change in children's moral reasoning. *Merrill-Palmer Quarterly*, 28, 3, 347-367.
- Ervin-Tripp, S., & Mitchell-Kerman, C. 1978 (Eds.), *Child discourse*. New York; Academic Press.
- Maitlund, K. A., & Goldman, J. R. 1974 Moral judgement as a function of peer group interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 699-704.
- Miller, S., & Brownell, C. 1975 Peers, persuasion, and Piaget: Dyadic interaction between conservers and non-conservers. *Child Development*, 46, 992-997.
- Piaget, J. 1932 *Le jugement moral chez l'enfant*. Paris: Felix Alcan. (大伴茂訳 児童道徳判断の発達 同文書院)
- Smedslund, J. 1966 Les origens sociales de la centration. In F. Bresson M de Montmain(Eds.), *Psychologie et epistemologie genetiques*, Paris: Puno.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*, New York: Norton.
- Youniss, J. 1980 Parents and peers in social development: a Sullivan-Piaget perspective. University of Chicago Press, Chicago.
- Youniss, J., & Volpe, J. 1978 A relational analysis of children's friendship In W. Damon(Ed.), *Social cognition: New directions for child development* (pp. 1-22). San Francisco: Jossey-Bass.
- 渡辺弥生 1986 分配における公正観の発達 教育心理学研究 34(1), 84-90.
- 渡辺弥生 1986 公正観と分配行動との関係 日本教育心理学会第28回 総会発表論文集 892-893.